

令和5年度第1回文化芸術に関する意見交換会

- | | |
|------------------------|---|
| 1 日 時 | 令和5年12月15日（金） 14時00分～16時00分 |
| 2 会 場 | ときわ会館5階 中ホール |
| 3 出席者
(敬称略、役職・五十音順) | (1) 委員長
村上和夫
(2) 委員
あらい太朗、市橋大、小田慎也、川崎賢一郎、小泉文、
小林桂子、関井一夫、坪内間、遠山昇司、伴戸武三、
吉原浩
(3) 事務局
スポーツ文化局 鶴田局長、川田部長
文化政策室 原田室長
(4) 欠席者
加藤崇寿[晴彦]、渋谷七恵 |
| 4 公開・非公開の別 | 公 開 |
| 5 傍聴人の数 | 1人 |
| 6 内容 | (1) 開 会
(2) 挨 拶 (スポーツ文化局長)
(3) 委員改選
(4) 報告・意見交換内容
① さいたま市文化芸術都市創造計画の令和4年度の施策状況について
② さいたま国際芸術祭2023について
③ その他
(5) その他
(6) 閉 会 |

会議記録

- (1) 開会
- (2) 挨拶（スポーツ文化局長）
- (3) 委員改選
- (4) 報告・意見交換内容

<① さいたま市文化芸術都市創造計画の令和4年度の施策状況について>

- 事務局 [資料1] さいたま市文化芸術都市創造計画の令和4年度の施策状況報告、[資料2] さいたま市総合振興計画実施計画（抜粋）を中心に説明
- 村上委員長 ありがとうございます。ただ今の事務局からの説明につきまして、ご意見、ご質問があればご発言いただきたい。
- あらい委員 成果指標の調査結果はどうやって算出しているのか。
- 事務局 さいたま市市民意識調査の結果に基づいており、市民からランダムに選び、回答していただいているもの。
- 関井委員 「そう思う」「そう思わない」具体的な理由はわかるのか。
- 事務局 選択式の回答方法のため、わからない。
- 小田委員 前年度の会議の議題であった「アーツカウンシル」の活動状況について何かトピックスがあれば教えてもらいたい。
- 事務局 「アーツカウンシル」については令和4年10月に設立された。事務局は公益財団法人文化振興事業団に置いており、事業を開始している。令和4年度については設立したばかりであり、準備等に費やした。令和5年度からはさいたま市で行っていた文化芸術都市創造補助金（現・文化芸術都市創造助成金）をアーツカウンシル課に移管して、専門性を活かした支援を始めたところである。
- 村上委員長 文化芸術を活用している事業数が増えた理由は何か。
- 事務局 具体的な理由まで分析できていないところであるが、令和3年度からさいたま市の上位計画である総合振興計画に沿う形で文化芸術都市創

造計画が新しくなり、事業や集計方法などを見直した。また、周年事業として政令指定都市移行・区制施行20周年と併せて事業を行っていることも事業数が増えた一因として考えられる。

小林委員 事業数が増えているのはわかるが、次回から文化芸術関連事業に掛かる予算がどうなっているのか併せてみていきたい。単純に担当の業務が増えているだけなのか、予算と併せてみないとわからない。

事務局 予算要求については各所管で実施しているものであり、こちらから予算の増額を要求するのは困難ではあるが、事業数を増やしていくことで文化芸術全体の予算の増額につなげていきたい。

村上委員長 予算が増えることも大切だが、文化芸術に対する関心をどのように増やしていくかという点も大切である。一概には言えないが、例えばアーツカウンシルができることによって、アーツカウンシルと連携をとるいろんな部局が増えたり、芸術祭を開催することによって、関係部局が参加者を紹介してくれたりする機会ができる。

村上委員長 他にご意見ありますか。無いようですので、次に報告・意見交換内容②について事務局から説明をお願いします。

<② さいたま国際芸術祭2023について>

事務局 [資料3] さいたま国際芸術祭2023開催概要 を中心に説明。

村上委員長 ありがとうございました。
市民参加型のプログラムや公募プログラムなどをすべて見たわけではないが、この芸術祭を何回か拝見した。年を追うごとにだんだんに成功しているという感想を持った。2016年に芸術祭が始まったとき、岩槻人形博物館の仕事をしていたが当時は「なんで無理やり参加しないといけないのか」という意見もあった。その時は芸術祭に参加する意味・動機付けがあまり大きくなかったが、当時と比較すると今回は飛躍的に面白くなったと思う。根幹的な印象としては、「ただ海外の有名作品を持ってきて飾るような芸術祭」でなくてよかったなと思った。アートを楽しむというポイントは、もっと広く市民の生活のなかにあるという点を追及してきて、今日にいたっている。旧市民会館おおみやのプ

プロジェクトは特に刺激的。1980年代くらいのアートの先端のシーンがわたしたちの目の前に登場する、あるいはマーケティングの言葉で言う「再帰的近代化」がごく自然なかたちで行われた感じがした。ほかの市もまねてやってくれるといいなと思う。誰がアートを創っていくのか、そういう視点がさいたまの芸術祭には明確に出ているという印象。芸術祭の中でアーティストの方々が一緒にやるということは、市民の皆さんがそこに参加して一生懸命やっているからそういうことが起こること。

そんな中で3つテーマを挙げて意見を交換していきたいと思う。まず1つ目は比較的若い世代の方はこの芸術祭に参加してよかったと思ってくれたのか、彼らの生活に刺激を与えられたのかという点。実はさいたま市は比較的人口の平均年齢が若い自治体である。政令指定都市でみると3番目か4番目に若い。平均年齢よりも若い世代に対してアートはどう刺激を与えたのか、生活やビジネスに対して新しい考え方や考える機会を提供できたのかという点を話し合ってみたい。2点目は、市民参加やいろいろな芸術家が参加するという話である。アートを見に来た方がどうやってアートに参加できたのか。共創（コ・クリエーション）ともいう。アートを展示しただけではおそらく作品が終わってしまう、作品を観た人がどのようにその作品と関わったのかというあたりをどう保障したのかという点を話してみたい。3点目はDX。公式の動画閲覧数は少ないが、例えば全国でまちづくり関係の動画は閲覧回数がそれほど多くはないが、観光・プロモーションの動画は成功すればあっというまに100万回を越える動画になる。デジタルの中でどうやって発信して、どのように掲載されたのかどうか、そしてそれがどういう解釈でどのように広まっていったのか。芸術祭が社会に対してどのように影響を及ぼしたのか、気づきがあれば教えていただきたい。以上3点が私からみなさんをお願いする意見交換のテーマ。

まず1点目は若い世代の方々に対してこの芸術祭がどのようにインパクトを与えたか。2点目はこの芸術祭は観る人を含めて新しいアートや観る機会をどう創り出したのか。3点目はデジタル化した空間の中で芸術祭はわたしたちに何を与えてくれたのか。3つのテーマについて話していきつつ、他に何かテーマがあれば言ってほしい。ではまず1つ目について何かご意見がありましたら、お願いします。

遠山委員

今回の芸術祭に何回も伺った。市民プロジェクトやメイン会場、連携プロジェクトなどいろいろ観た。本当に類をみない新しい市民参加型の

芸術祭だったと思う。映画の世界では良いドキュメンタリーはときにフィクションに見える、良いフィクションはときにドキュメンタリーに見えるというが、現実と虚構みたいなものが、メイン会場に関しては1枚の亚克力板を遮ることによって浮かび上がっていた。そのディレクターの手腕はすごかったと思う。気になるころはあったが、若い人たちにということに関しては、会場に若い人たちがたくさんいた。一つ比較としてあげるのは、今年新宿歌舞伎町で Chim↑Pom というアーティスト集団が廃墟となっているビルを丸ごと使ってアートプロジェクトを展開した。それにも行ったが、若い世代が多かった。今回の芸術祭も似ていて、使われなくなったような場所にもう一回お客さんが入り込んでいくという刺激がある。もう一つ、自分自身整理ができていないが、芸術祭は現実の力と虚構の力をどっちももらって作っていると思っているが、今回の芸術祭は虚構の力が強すぎたのではないかと懸念をもった。ディレクターの意志によるものではあると思うが、虚構の力に若い人たちが惹かれていっている現実を作家として感じた。一方で芸術祭は現実の世界に対して応答する役目を持っているものだと思う。2020年の芸術祭の時は目をふさぎたくなるような現実世界の中で虚構に向かっていくというのはある種シェルターのようなこともあるのかなといろいろ考えて思った。虚構性が良かったのか悪かったのか分析しきれないが、そういったところに若い世代が惹かれてるのは肌で感じた。

あらい委員 実際に若い世代にうけたといったデータがでているのか。

事務局 まだ調査中であり、結果がでたら報告していきたい。

あらい委員 前回の芸術祭のほうが面白くて、今回の芸術祭はつまらなかった。現代アートを面白いと思う人が当たり前に来るわけがない。そのような芸術祭を市が挙げて開催するのは無理があると思う。さいたま市の若い芸術家たちが呼び掛けてさいたま市で何かやりたいということに対して市が協力するというスタイルだったら良いと思う。市民に芸術を広めるのであれば海外の有名作品をさいたま市で展示した方がまだ集客があると思う。今回の芸術祭はキャプションなどの解説がなかった。メイン会場の亚克力板もただの行き止まりのようになかった。一般市民の方にとってみるといらっとするようなことだったと思う。もしそういった会場にするとすれば、その説明がないと納得できな

い。曖昧にして解説なしでいくとしたら、そういう触れ込みなどを行わないと。行政だったら、メイン会場を解説するようなガイドをやってほしかった。

関井委員

実際2つの大学で芸術祭の話をしたところ、まず一般の大学に通う大学生は「何かわからなかった」という印象で、もう一方の美術系の大学に通う大学生は作り手の見方で作品を鑑賞していた。最終日に近づくにつれメイン会場に若い人が増えてきた印象。たぶん SNS などで拡まったからだと思う。私は会期中にアウトオブ企画を実施した。その企画は一般の方を募って、メイン会場を観に行くというもので、一緒に鑑賞した方と意見を出し合って、かなり芸術祭のメイン会場について読み解いたと思う。面白くなかったという意見もあるが、会場を読み解くとかなり面白かったと思う。一般市民の人が読み解くにはどうすればよかったのか。作家ファーストと市民ファースト、今回の芸術祭でかなり問われる点になったと思う。メイン会場の目の企画は、いろんな問題を訴えかけるきっかけになった。捉え方によっては、二度と行きたくないと思う人もいるし、意外と面白かったからもう一度行ってみたいと思う人もいる。そういう意味では今回の芸術祭は今までにない面白い芸術祭になったのではないかと。

あらい委員

「面白い」の中の種類の一つとして「つまらない」という感想であって、つまらなかったからお金を返せという意味で言ったわけではない。今日は市民目線に立とうと思っているので、そういう意味で言うと行政が責任をもって現代アートに責任を持つのであれば、遠山委員や村上委員長のような説明を、体験する前にして欲しかった。

小泉委員

今回公募プログラムで芸術祭に参加した。来場した方に自分自身を撮影してもらおうという企画を行った。その中で20代前半の方が訪れた。話を聞いてみると、頑張って大学に入ったが、勤務先がきつくて辞めてしまったと泣きながら入ってくるというような感じで。アートというものが個々の感情にどう響くのかわからないが、その方に関しては写真を撮り終えた後に「頑張ります」というような感じで去っていかれた。自分自身アートというものがよくわかってはいないが、彼女には何かしら感情が動いたのかなと思った。

小林委員

自分のゼミの学生を、芸術祭を観に行かせた。アートを学んでいる学生

やアーティストを目指している学生ではなく、普段からそんなに美術館に行くことがない学生である。現代アートの作品を、さらに今回のような、説明が少ない状態で観るという経験がほぼ初めてだったため、学生みんな驚いて帰ってきた。そういう意味では、国内であれくらいラディカルなことをやって、行政が許すということはとても貴重な体験ではないか。個人的には空間は面白かったが、個々の作家がどう思ったか興味がある。学生はとまどいがあったかと思うが、若い方にとっては、疑問が増えれば増えるほど良い体験になると思うので、そういう意味では貴重な機会になったと思う。

村上委員長

ビジネスの面から言うと、1980年代のスターバックスで似たような出来事が起こった。自分たちの生活がどのように展開しているか、客観視できる機会を与えて、その中からアートを探そうというもの。具体的には、店内にチェステーブルが置いてあり、そこで時間をつぶしなさいという、結局無くなってしまいました。スターバックスは市の中心地の歴史地区で登場したわけですが、その出来事は近代を見直すという視点だった。今回は観る人に参加が要請されていて、参加できた人とできなかった人がいる。そういう意味では、参加できた人は街の中にもあるやつだよと直感できたのではないか。スターバックス以外でも日本に似たケースがでてきた。例えば、アバンギャルディというダンスグループなど。これから我々がどう解釈していくかわからないが、読み解いていく世界は本来未来のことであるはずだが、未来をもう一回過去の中に登場させてそれに対してどう考えるか。そういう感じの芸術祭だったと思う。若い人にとってはショックだったのではないか。というのも、誰の作品かわからない、どこに作品があるか書いてない、スケーパーは本物かどうかわからない。良い機会だったのではないかと思う。

あらい委員

テーマを若い世代としているが、何を導き出そうとしているのか。

村上委員長

市がやる芸術祭は少なくとも市民に対して、アートを鑑賞する機会を提供するもの。過去の作品を観ることは悪いことではない。一方で若い人たちが今後自分たちの生活の中でアートを取り込む、自分も一緒になってアートを創る、そして自分の生活のなかにアートを発見する、そういう機会を今後提供していけたらよいのではないかと思う。

あらい委員

だとしたら、若い人を呼び込むための仕掛けが今回は足りなかったの

ではないかと思う。

市橋委員

芸術祭公式の X のフォロワー数が 3181 人。数が多いのかどうか。昨年
もこの件で発言をしているが、今の若い人たち、例えば一人暮らしをし
ている方はテレビやラジオはもっていない。SNS など情報収集して
いる。国際芸術祭のフォロワー数がこの程度では若い人たちへの発信
は全然足りていないと思う。せめて国際芸術祭を名乗るのであれば、日
本でも名だたる現代アートの作家を一人でも参加させることはできな
いのか。モナ・リザをではないが、有名な人がいれば行ってみようとい
う気になる。もう少し頑張ってほしいと思う。

伴戸委員

メイン会場に行ったが、このような事業はさいたま市でやるような事
業ではないと思う。民間の団体で自由にやってもらった方がもっと盛
り上がるのではないかと。一つ苦言を言うと、入場券を当日購入した
が、さいたま市に住まいがあるかと聞かれ、住まいがある回答をしたう
えで、住所を書いた。そのあとに身分証明書の提示を求められた。はじ
めから身分証明書の提示だけでよかったのではないかと思う。

あらい委員

人形博物館の展示が面白かった。古き伝統を守る立場としてあのア
ートは率直にどうだったか。自分はとても面白かったと思う。

伴戸委員

反対はなかった。せっかくだから、人形博物館の人形を使えばよかつた
と思った。

村上委員長

若い世代にどういう可能性、刺激を与えられたのかというと、来た人た
ちはとても刺激を受けたのではないかと思う。それをどうやって広め
るかどうかが難しいところ。一方で伴戸委員から意見が出た、資金をど
ういう所でどう使うかという点については、芸術祭のプロデューサー
などがもう少し説明をする必要があったと思う。実際どのようにア
ートが観られているかという、必ずしもこれがアートというものを説
明できる人はいないと思うので、お金の使い方ややり方などに対して
だめだとは言えないが、より積極的に使おうとすればこういうやり方
があるなどの議論はできるのではないかと考える。

次のテーマ、芸術祭に多くの人たち・来場者が参加できたのか、市民参
加についてみなさんに伺いたいと思う。私が先ほど一つの仮説を話し
たとおり、誰の作品か書いていなかったり、スケーパーがいてアート作

品なのかそうでないのかわからなかったりした。そうすることで作品がどこにあるかわからないということは、それを見に来た人にとって作品として見てもらえたかどうか。

関井委員

先ほど話したアウトオブ企画のとおり、スケーパーをやってみようかという話になり、実際にやってみた。何人か芸術の専門家も参加していたが、芸術祭の作品はいわゆる“アクシデント”というような表現方法だよねという話になった。メイン会場大ホールのステージの裏に立って、ステージ上で練習している人たちを「進撃の巨人」のような壁をつくってじっと観た。15分くらいやっていると、わたしたちはスケーパーなのかそうでないのかだんだんわからなくなった。そういった意味ではそのように参加できた人たちは面白かったと思う。会場に行って一緒に遊んじゃおうという感覚になった瞬間に、たぶん参加できたのではないかと。また、連携プロジェクトの方で行ったものとして、来場者にドットシールを配り、パネルにシールを貼ってもらう市民参加型の企画を行った。参加者の中には、シールを加工する方や、パネルではなく壁にシールを貼る方などいろんな人がいたので、さいたま市民の人は独創的なアイデアを持っている人が多いのではないかと思った。

遠山委員

2020年の時にはコロナもあって、イベントが軒並み中止となり、開催できなかった。今回体験して一番楽しいなと思ったのは、イベントが復活していること。それって参加できるコネクトができるということ。2020年の時はコネクトすることが許されなかったもので、その復活がうらやましかった。メイン会場で行っていた「指揮者が出てきたら拍手をしてください」はかつてバレエをやっていた人たちだけによる演劇。それも市民が舞台上に上がって参加している。また一方で、2016年から続く市民プロジェクトの方も大事だと思っていて、そちらでも市民によってつくられている演劇の企画もあった。「私の国からこんにちは」。これも小学生5人くらい参加していて、市民の人たちが自分たちで舞台を作っている。こういう企画は2016年から続いて行っているものであって、市民参加として向かっている部分が今回はちゃんとできてきたなと思う。観る人も自分の記憶や体験と重ねながら観ていると思う。その点においては、メイン会場だけではなく、市民プロジェクトの活動にも目を向けていくべきだと思う。

村上委員長

遠山委員にお聞きしたいのだが、それをやるためにどこかで練習して

くるということはあるのか。例えば、演劇に参加したくて SNS を経由して練習に参加することができるなど。

遠山委員 メイン会場の方は関わっていないのでわからないが、まず一般公募があって、特に応募する上で条件がない、例えば SACP など。そこでは6回のワークショップを経て、一つの作品にしている。

村上委員長 ありがとうございます。ほかに何かあるか。

小林委員 私は公募プログラムの中の沼影プールの映画を観に行った。この映画も出演者を募集して、取材を重ねてドキュメンタリーを撮ったもの。上映会は浦和のコミュニティセンターで行っていた。映画に携わっていた方、サポーターは普段マネジメントをやっているような方ではなく、ご年配の方などが多かったという印象。この映画の上映会も、もう少し良いところで上映してもよかったのではないかと思うくらいの手作り感。でも作品はともしっかりしていたので、そういう意味ではさいたまの方はラッキーだったのではないかと思う。

あらい委員 映画の長さはどれくらいだったのか。

小林委員 だいたい2時間弱くらいだった。

関井委員 NHK で確か放送されていなかったか。

小林委員 拝見してなくてわからない。

坪内委員 私たちは鉄道博物館でやらせてもらったが、お客さんが並ぶ通路のところに作品が展示してあった。博物館に行くお客様がなんとなく何かやっているというような雰囲気、横目で作品を見ていたと思う。個人的には、自分自身さいたま市に住んでいる。自分の妻が芸術に特に興味を持っているわけではないが、自分はもともと美術系の学校に行っていたので美術に興味がある。実際にメイン会場にも行ってたくさん若い人もいた。興味がある人は率先して参加していたと思う。妻の話に戻るが、彼女はそもそも国際芸術祭がどんなものなのかかわからないが、沼影プールの映画には観に行っていた。子どもが産まれたら行こうと思っていたが、結局行けずに閉まってしまう。なんとなく生活に没入した

体験があったので、行ってみようと思ったのではないかと。そういう意味で言うと、芸術に興味がある人が芸術祭に参加するのは評価にならないと思う。芸術祭がどんなに遠くても、芸術に興味があれば行くから。年齢が若かろうがどうか関係ない。どちらかという、私の妻のように芸術に興味がない人が行ったことに対して評価をするべきだと思う。なので、鉄道博物館に来た鉄道が好きな人が芸術祭の作品を覗いたことは評価していいことだと思うし、妻のことも評価したいと思う。

村上委員長

普通の人アートに参加できる機会がさいたまの芸術祭にはあると思った。その部分を大切に、もっと膨らましていくべき。

最後のテーマだが、DX、デジタルとアートが関わる点について話していきたいと思う。例えば公式動画の再生回数が468回など、考えてみるとそこには面白さがなかったのではないかと。一方で目の方々のSNSは見られたのではないか、作品に名前が付いていなかったがその作者のサブスクライバーが増えたのかとか、それに参加することによって次の機会を生む、そんなことが芸術祭の中であったのではないか。リアルではなく、デジタルの上でそういうことが起きなかったのか。

吉原委員

テーマに少し触るような内容かもしれないが、私も何回か市民会館のおみやぎに行って、1回目と2回目と行ったあとの印象が全然違った。まず1回目に行ってなんだと思って、その後ネットでいろいろ見てみるといろんな感想が掲載されていた。それを色々見ていたらこういう見方があるのだと。それを踏まえて2回目行ってみたら、まったく見方が変わった。少し前に触れ込みの話をしてしたが、解説を無くすとか、アーティストの名前を掲示しないとか、どれが作品かわからないところから、そういうのを省いたことはよくわかったが、省いたことは良かったのでしょうか。それを読み解く力がついたのかと言われるとそうでもなくて、そういうサジェスションを受けることで、見方を変えることができた。なので、1DAYチケットではなく数日かけてみた方が良いと思った。また根本的なことをいうと、機運醸成が今回の芸術祭であまり感じることはできなかった。芸術祭を2か月くらいやっていて市民がどれだけ認知度を上げることができたのか。機運醸成で何がなかったのかという、テレビや新聞、ラジオなどでほとんど見聞きしなかった。「やってること」自体わからないと、これだけお金をかけてやっているのもったいない。機運醸成の仕掛けをなくして、終わってしまったのはどうなのか。アンケートでも認知度をはかってほしいな

と。

あらい委員 SNS で広める意味を含めたうえでの DX というテーマですか？

村上委員長 おっしゃる通り。

あらい委員 SNS もそうだが、アナログ部分においても周知が行き届いてないのは、前回もずっと言っていたが、このロゴは目立たない。まちなかでこのロゴの旗がかけられていたが、全然誰も引っかかかっていなかった。2020の時はまだ青いロゴで、それでもまだまちなかに溶け込んでしまっていた印象だったが、今回はそれにも増して地味になった。逆に点1つだけの方が良かったのではないか。前回の意見交換会で今後の展開に期待してくださいと言われて、期待していたが何もなかった。例えば、さいたまの「さ」の文字や岩槻の人形の顔を大きいバルーンで街の上に飛ばすとか、アナログだけでもっとインパクトはあったと思う。私はこういうことをやる時はアートをデジタルでどう醸成させるか以前に、宣伝というか、委員長がかなり前におっしゃっていたこういう市民の芸術祭は3つの要素がある、一つ目は純粋なアート、もう一つは参加型のアート、そしてもう一つは広報のためのアートが必要だと。この広報のためのアートが毎回特に欠如していると思う。それはもうデジタル以前の話だと思う。

関井委員 NHK の夕方の番組でさいたま国際芸術祭2023が取り上げられていた。また日曜美術館のほうでも取材されていた。あれは行政のほうからの働きかけだったのか。

事務局 基本的にテレビ番組については取材になるので、先方から依頼をうけるという形だが、中にはディレクターやこちらから働きかけたものもあると思う。

関井委員 NHK の番組は夕方しかやっていなかったが、放送が会期中盤で、あれは効果があったのではないかと思う。自分の妻がその放送をみて開催していることを知った。もう少し早いタイミングで放送されればなおよかったのかもしれない。

小林委員 結構ちゃんと取り上げられていたのか。

関井委員

しっかり取り上げられていた。

村上委員長

広報・PR、CMなどの動員の話自体、アートとして時代遅れ。個人化した状態の中でアートが成立するとする、その後アートを観てくれた人が自分のものとして捉えているか、そしてそれを交換する世界は、例えば SNS のようなもので交換されていく、芸術祭でどれほど多くの人が来たかというのは一つのメルクマールだけど、そのアートと際立った別の世界は DX でつくられるという可能性がある。私の専門は観光事業だが、DX に言われるデジタル化により創られるような動きをこの芸術祭はどのように今後していくか、その辺についての意見を伺いたい。私は PR や CM はあっていいと思う、特にパブリックリレーションズはほとんどないので。一方でコンテンポラリーアートをパブリックリレーションズにしていくのはどういうことなのかと思うが。行くとわからないものをやっています、と説明するのは少なくともラジオでは難しい。

小林委員

ひと昔前は、アートフェスティバル等で、屋外で展示する際はアプリをリリースすることが多かった。そういった意味ではマップを活用するとか、お金はかかるが今回のように比較的会期が長くて、開催場所が非常に多数あるので、ウェブサイトに併せてアプリがあることで、巡りやすくなるのではないかと思う。支払いの機能もアプリに紐づけることもできる。市民なのか県民なのかも登録情報で解決できるので、今後参加することを促進するツールとして導入してもよいのではないか。

村上委員長

小林委員がおっしゃったのはコンベンションという話で、教育のコンベンションもそうで、市は今後考えていった方がよいかもしれない。お金がそこまでかかる話でもない。例えば、入場したあとの処理をどうやって DX 化するか、DX で何かとコンビネーションしてつくることなど何かできることがある気がする。女子プロレスは手芸や街のイベントとリンクしている。プロレスはやっている瞬間だけが面白い、瞬間にアートがある。それが SNS などにあがっていると、手芸とプロレスはかなり長い期間楽しむことができたりする。そしてそれがアートに共通性があるところを見つけ出していくという次のチャレンジができる。なので、そういう意味では DX を使いながら次のチャレンジをどうやって考えていくのかというのはもしかしたら今後のテーマになっていくよ

うな気がする。

3つのテーマの話が終わりました。小田委員、何かありますでしょうか。

小田委員

記者発表会の案内をいただいたので事務局に問い合わせた。広報予算がどれくらいあるのかと聞いてみたところ、あまりないというような話を伺った。想像ではあるが、展示等プロデューサーなどの組織はかなりしっかりしたものがあるのかもしれないが、広報の戦略や広報プロデューサーが若干手薄なのかなという風に思った。今、広告の予算はテレビやラジオではなく、ネットや SNS に多く使われている。SNS や検索エンジンの結果などはお金で買ってしまう時代なのでそういうところに広報予算を投入していくべき。さいたま市の広報番組の動画データをそのまま YouTube に掲載しているのをみた。芸術祭を PR している動画というのがあって、デジタルの広報戦略というのはこれから重要になっていくのではないかと思う。また、今回メイン会場に行ってみて正直腹が立った。お金を払って入ったのに、空き缶であふれているごみ箱などがあって。だが先ほど吉原委員が言ったように帰ってから SNS やネットを見たら、面白かったというコメントがたくさんでてきた。それはオフィシャルの SNS ではなくて、ほかのロコミで。それを読んで、あの展示はこういう意味だったのか、などとても分かりやすかった。正直このパンフレットよりもロコミの方が刺さった。デジタルの広報活動も王道の PR 活動ではなく、変な PR 活動を行って行って変な展示を見せるとか、ソフトバンクが行っている変なホテルや池袋の残念ないきものたち展でやっているコピーのように、そんなアプローチで行った方が良かったのではないかと。

村上委員長

とても重要な意見を小田委員や吉原委員からいただいた。面白かった点は、メディアのジャンルが変わっているという点。今やデジタル化したネットワーク上にもものをつくっている。一方でオフィシャルのサイトではコンプライアンスが最重要。オフィシャルのサイトでコンテンポラリーアートを正直に語るわけにはいかない部分がある。だけど残念ながら、コンテンポラリーアートの余白の部分をどうやって人々に伝えたらよいのか、その部分が次の課題かと考える。これは全体を見てもそうで、コンテンポラリーアートの基本的な批判力というのは経営的なマネジメントの視点からみると、商品があって商品が我々を楽しませてくれるそういう側面がある。次に考えないといけない課題

は、ただ有名な作品を持ってきて芸術祭を開催するというのではなく、さいたまの芸術祭は土壌を固めているわけだから、それをどうやって伸ばしていくかという点を次のプロデューサーに考えていただきたいと思う。

あらい委員

会期の最後の方に本音会議というものを市民プロジェクトの方で行った。そこで言ったのは本音会議を会期の最後に 2 時間だけやるのも変な話だと思う。しかもその中でその話は完結されてしまう。アートは本音だと思う、建前のアートは成立しない。それを芸術祭としてお祭りをやっているのに、それを建前とかしがらみとかいろんなものなかでやっているというのは感じた。市長にぜひ芸術祭の本音を言ってほしいと思う。記者の前でつまらないって言ったらもっと来場客が増えると思う。それくらいの意気込みでやってもらいたい。

(5) その他

事務局より報酬及び会議概要についての説明

(6) 閉会

さいたま市スポーツ文化局文化部文化政策室

電話 829-1225

FAX 829-1996